「漢字の泉」

第二回 企画展【一日為師 終身是父 -一日師となれば 終身の絆たり-】展

1927年北京、西山石居漢文塾で結ばれた師弟の絆　九十九周年記念展

2026年
11月28日(土)～
12月6日(日)
但し、11月30日(月)休館日

開館時間｜10:30～16:00
(入館 15:30 まで)

〖 入場無料・予約不要 〗

展示解説
全日 11:00～ および 13:30～
解説｜欧陽效平

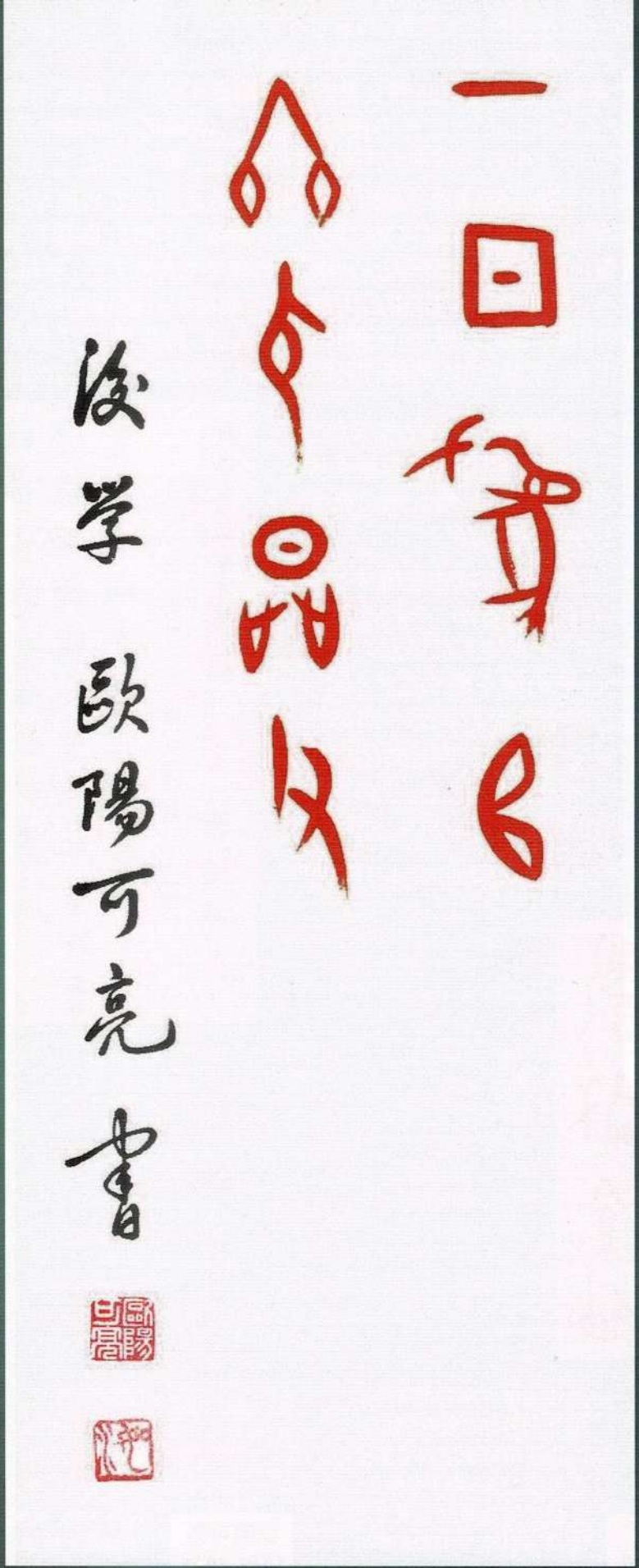
会場　高碕記念館

宝塚市雲雀丘1丁目7-58



〈アクセス〉
阪急「雲雀丘花屋敷」駅下車
西口から山側へ徒歩7分
(駐車場はございません)

主催｜文化講座「漢字の泉」
後援｜宝塚市教育委員会
中華民国二二八事件紀念基金會
一般社団法人日中友好協会
一般社団法人日中協会
一般社団法人李徳全研究会
一般社団法人周恩来平和研究会
在日華人女性交流会
協力｜高碕記念館



「一日為師 終身是父」(『集契集』1976年中国語版 9頁所収)

文化講座「漢字の泉」は、中国の甲骨文学者・欧陽可亮の学説を軸に、漢字が生まれた背景や、文字に込められた心を知ることに取り組んできました。欧陽可亮は、わずか20歳で、王国維・観堂、羅振玉・雪堂、董作賓・彦堂、郭沫若・鼎堂と並ぶ甲骨学者として認められ、「泉堂」の学号を授かりました。その原点には、中国の国語辞典編纂の第一人者である汪怡との出会いがあります。汪怡は、9歳でチリから帰国した腕白な少年・欧陽可亮の個性と興味を受けとめ、その才能を大切に育てました。師の恩は、山よりも高く、海よりも深いのです。

2024年の第一回企画展「和為貴-わをもってとうとしとなす-」では、1949年8月12日の日本人引揚げに中国紅十字会が協力したことを背景に、1954年、日本赤十字社が中国紅十字会を日本へ招待したこと、そして同年、周恩来総理が、日本敗戦時に接収していた東亜同文書院大学編纂中の中日辞典単語カード14万枚を、文化促進の「贈物」として日本へ返還したことを紹介しました。その資料をもとに、欧陽可亮が語源語誌を検討し、妻張禄澤が例文を作成して編纂に携わり、1968年2月、『中日大辞典』が刊行されました。第一回は、こうした日中文化交流の歩みを記念して開催しました。

今年2026年は、汪怡が私塾で9歳の欧陽可亮を教え始めて99周年にあたります。また、汪怡が、詩を甲骨文字で表したノート『集契集』の出版を欧陽可亮に託して66周年、さらに、欧陽可亮が15年をかけて版下を書き上げ、息子・效光の編集により自費出版されて50周年という節目の年でもあります。蘇軾は、恩師・欧陽脩への弔辞に「一日為師　一生為父」と記しました。異国の日本で『中日大辞典』の編纂や外務省研修所、国際基督教大学での教育に従事した欧陽可亮は、『集契集』の出版に際し、恩師・汪怡に「一日為師　終生是父」と献言しています。汪怡は、溥儀・溥傑兄弟にとっても共通の恩師でした。本展では、溥儀・溥傑兄弟とも恩師を同じくした汪怡と欧陽可亮、その師弟の絆をたどります。

契文は殷代の甲骨文字です。すなわち現在使われている漢字の最古で最も美術化された文字です。（中略）誠に斬新な骨董品ではありませんか。

学者の中には新を取れば古を廃すべきだといういい者もおられるが、それは新の根源が古にあることを知らないからです。古を廃すことはその源を断つことと同じことです。ましてや、古文字は一切の学術文化の根源です。仮に学術文化の根源が枯渇してしまったとしたら、この国に如何なる文明があるというのでしょうか。

（『集契集』1976年中国語版 より抜粋）

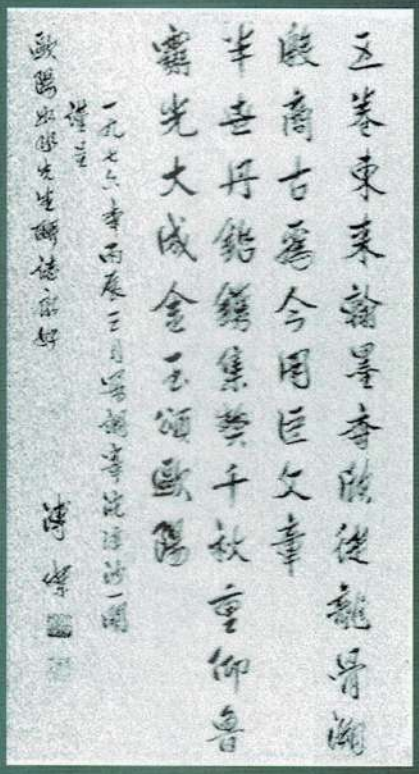


「飲和食徳　益寿延年」
汪怡・作／欧陽可亮・書

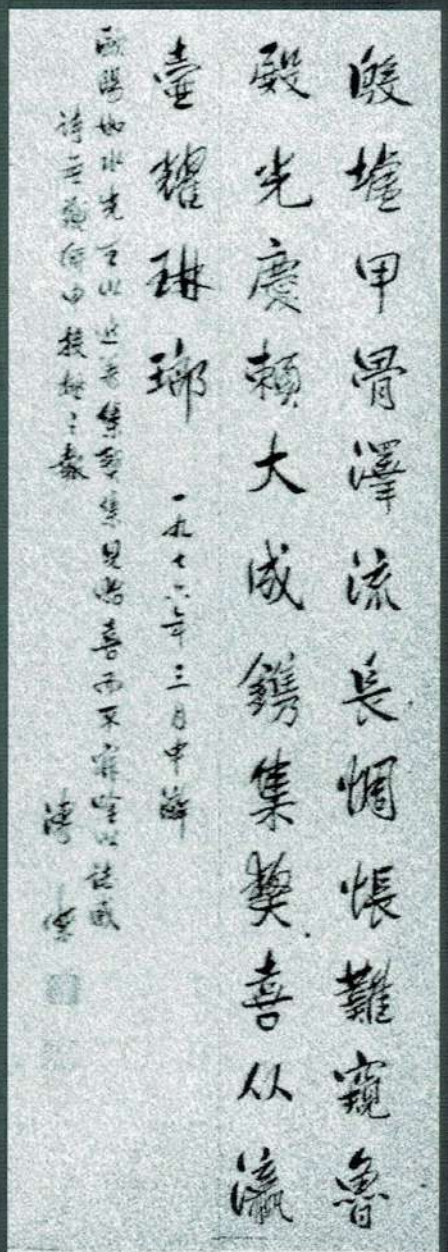
「飲和」とは、
人を愛し、
目をかけること。

「食徳」とは、
他人の誠意を
受け入れること。

（『集契集』1976年
中国語版 33頁所収）



「五巻の書物が東方（日本）から届き、気高い墨の香りが漂う。喜ばしいことにこれで甲骨を通じて殷商代の源流をたどることができる。恩師（汪怡）が古きを今に活かし、偉大な文章にした。あなたが半生にわたり、赤誠を込めて『集契集』に刻み彫った。千年の後までも、奇跡的かつ貴重な文化の光として深く仰ぎ見ることができる。大いなる成果は金玉のごとく尊く、欧陽氏の功績を称える讃歌とする。1976年3月、北京にて旧作を写し、謹んで呈す。欧陽先生が順風満帆で睦まじく、幸せでありますように。」　溥傑　印



「殷の遺跡から出土した甲骨文字の恩恵は、脈々と長く受け継がれてきた。しかし、時代の混乱によって、その極めて貴重な文化の光を直接仰ぎ見ることが難しくなってしまい、私は悲しみ惜しんでいた。まことに慶ばしいことに、あなたが見事に研究を大成させ、『集契集』として世に残してくれた。今、私は日本から、美しい宝玉（琳瑯）のように偉大な著作が輝いていることを喜んでいる。　1976年3月中旬、欧陽如水先生が『集契集』を贈ってくださった。私はそれを大いに喜び、この詩を作った。心から感謝を込めて。拙い詩ながら、どうぞご家族の皆さまが安泰でありますように。」
溥傑　印



汪怡
1877-1960

義和団事件が勃発すると、東北部各地に赴き、独自に注音符号を用いて子どもたちに読み書きを教え、多数の国語教師を育てた国語運動家。国語辞典・国音字典の編纂者。甲骨文字と『説文解字』の部首から37字の発音記号「注音符号」を作成、実践。マテオ・リッチとトリゴーの『西儒耳目資』を整理し、ピンインの基礎を築いた。「田鎖式速記法」をヒントに、1919年に「汪怡式国語速記」を出版。話し言葉と書き言葉の一致に貢献した。張蔭棠元駐米大使が開設した私塾では、欧陽可亮を小学3年から高校卒業まで指導。



欧陽可亮
1918-1992

1938年3月27日、中華全国文芸界抗敵協会の成立に参加。馮玉祥に紹介された郭沫若から学号「泉堂」を授与され、甲骨学五堂入り。張禄澤と結婚。1941年に東亜同文書院大学に就職。1954年、周恩来総理が日本敗戦時に接収した中日辞典単語カード14万枚を贈ると、夫婦で辞典編纂に従事し、1968年『中日大辞典』初版は一世を風靡した。1960年に汪師から『集契集』出版を遺言され、1976年に結実。1984年に和訳版出版。1984年、甲骨片は殷商の歴史記録だと殷墟筆会で発表と同時に1989年に甲骨文字発見90周年記念国際大会を提案した。